

第4章 国見町の歴史文化の特徴

第2章・第3章までの記述を基に、本町における時代や地域を特徴付けていると考えられるキーワードを抽出した(表4-1)。これらは、後述する関連文化財群の設定につながっていく視点であり、本町の歴史文化の特徴として位置付けられる。

以下にキーワードから導き出される本町の歴史文化の特徴について説明を加える。

表4-1 国見町を特徴付けるキーワード

盆地地形	戦跡・城館跡	境界	街道・交通
宿場	稲作	養蚕	果樹栽培
地域社会	信仰	近代化	国見石(石材産業)

(1) 盆地地形と街道・交通に関する歴史文化

本町は奥羽山脈と阿武隈山地に挟まれ、阿武隈川水系により形成された福島盆地の北縁部に位置する。宮城県境近くに位置する阿津賀志山は、本町の盆地景観において特筆すべき山である。見る方向により山容が変化する特徴があり、「タンガラ山」「丸山」などの別名を持つ。また、古代から信仰の対象であったことをうかがわせる「経塚山」の名も残る。福島盆地を一望できる山頂の眺めから「国見山」とも呼称され、町名の由来にもなっていることから山及び関連する歴史文化に対する町民の認知・理解は深い。



写真4-1 阿津賀志山の山容

山麓と阿武隈川の間広がる平野部には古くから街道・宿場が設けられ、周辺各地(福島・仙台・山形方面)との間で、政治・経済・文化の様々な面において多様な交流・伝播が生まれた。江戸時代に参勤交代や物資輸送のため奥州街道・羽州街道が整備されたことで本町一带は交通上の重要性を増し、藤田・貝田・小坂における各宿場の発展につながった。

一方で、町の北東部には(奥州街道)国見峠と山麓の地狭部地形、北西部には(羽州街道)小坂峠の険しい山道があり、いずれも各街道における難所として認知されてきた。これに伴い、本町は古くから国境(支配領域の境界)・街道の関所として強く意識されるとともに、松尾芭蕉の『おくのほそ道』に代表される紀行文や民話等に登場する舞台となっている。

また、一帯には阿武隈川を利用した水運が設けられ、江戸へ納める御城米(年貢米)は、徳江の川港(津出場)からも廻米された。

明治20(1887)年には本町に鉄道が敷設された。レンガ橋の建設を伴う鉄道敷設は本町における近代化の嚆矢であったとともに、歴史文化や近代技術の交易・交流の促進を担った。近代化は本町全体に繁栄をもたらすとともに、町を代表する近代建築を有する奥山家などの豪商を生み出す基盤ともなった。

本町はこのような街道・宿場・交通の発展を示す遺跡・遺構や、街道によってもたらされた文物の集積・交流を特徴として有する。現代においても、鉄道・国道・高速道・新幹線が貫通する交通の集約地であり、地形と交通がもたらす歴史文化が密接な関係にあり続けている。

(2) 政治と軍事に関する歴史文化

本町は北部を奥羽山脈によって隔てられた福島盆地の縁辺部という地形的特徴により、古代に国造が置かれた北端域であり、郡寺の性格を持ったと考えられる古代寺院や地域一帯に権力を持った豪族の古墳などの存在が明らかとなっている。

平安時代末期には奥州藤原氏が支配領域の南端と意識した地域であり、「文治五年奥州合戦」（阿津賀志山の戦い）に源頼朝を迎え討つため「阿津賀志山防塁」が築かれた。奥州合戦の大勢を決したこの戦いは『吾妻鏡』に記されるなど、現代まで約1000年にわたり伝承されてきた。同史跡は国の文化財指定を受け、本町の歴史まちづくりにおける中心的存在として町民に認知されるとともに、関連した義経・弁慶・藤原氏に関する遺跡・伝説なども歴史文化として伝承されてきた。

中世から近世初期にかけて、当地は伊達・上杉氏によって比較的安定的な統治が行われたが、政治的・軍事的な要衝地としての位置付けは続き、一族・家臣団に関する歴史資料や城館跡・戦跡などが伝わっている。



写真 4-2 阿津賀志山防塁

(3) 農村社会に関する歴史文化

本町における狩猟・採取生活の痕跡は縄文時代前期に遡り、やがて阿武隈川沿いに古墳を造営する稲作集団へと変化した。古代には、東北地方でも有数の規模を持つ条里制水田や、農作に従事したと考えられる集落の存在が明らかとなっている。12世紀末に伊達氏が入部すると、一族・家臣団による農村支配が400年間続き、江戸時代には天領として幕府の財源となる米の生産と廻米を支えるなど、農村社会に関する長い歴史文化が存在する。

一方、農作地においては、古くから水田を支えるかんがい用水の確保が課題としてあり、ため池や水源開削に関する遺跡・歴史資料が存在する。中でも江戸時代初期に完成したかんがい用水（西根堰）は、現在も本町の農業を支える貴重な土木遺産である。

また、地域では古来より、農家の副業として養蚕業が盛んに行われた。その始まりは古く奈良・平安時代に遡り、近代には国策として養蚕業が興隆した。太平洋戦争による戦災や化学繊維の開発に押され衰退を辿ることとなったが、現在もあづま造と呼ばれる県北地方の特徴的な養蚕農家が現存し、養蚕に関する道具・風習・信仰なども伝承される。

養蚕業の衰退後、桑畑は果樹栽培（リンゴ・桃・柿など）、阿武隈川近くの畑は野菜類の栽培へと変化し、本町の主要産業へと成長を遂げるとともに文化的景観を形成している。



写真 4-3 農地の風景
(田畑と果樹園が混在する)

(4) 地質を反映した産業に関する歴史文化

本町の北西部にそびえる標高600～700mの山並みは、安山岩質集塊岩と凝灰岩で構成され、山麓斜面から平地への傾斜地では、堆積物が分厚い地層を形成する扇状地などと、凝灰岩類が露出している箇所が存在する。本町では、この地質から凝灰岩が採石され、その歴史は古墳時代の石室石材に使用が確認されている。近代になると、耐火性に優れた凝灰岩は「国見石」と呼ばれ、建築材料として流通した。石材加工は当初手作業によるものであったが、採石・加工の機械化に伴って爆発的に普及し、多数の石

蔵や石造建築物を有する町並みが形成された。

半田銀山においても、その採掘に近代技術が発揮された。半田銀山の採掘は桑折町を主体としたものであったが、日本三大銀山の1つである半田銀山の運営は、隣接する本町にも利益と歴史文化をもたらした。

本町の主要産業である農業に対しても近代化の波が押し寄せている。前述のとおり、ため池や用水路の整備に近代の土木技術が十分に発揮されたほか、主たる副業であった養蚕業にも近代的な技術と管理方法が導入され、生産と収入の安定化が図られた。

(5) 地域社会と信仰に関する歴史文化

本町の行政区分は昭和29(1954)年の町村合併以前の町村区分に準じるものである。現在もこの旧村単位は集落単位によって地域社会が構築され、時代・世代を越えた歴史文化が脈々と伝承されている。

地域社会における歴史文化は信仰を基盤とするものが多く、各集落では、春に五穀豊穡を祈り、秋に収穫を祝う祭礼等が執り行われ、早ばつの際には雨乞いを行い、農作物や蚕の出来を占い、絵馬等を奉納して各種祈願を行うなど、様々な信仰儀礼が行われてきた。これらは、生活・生業と信仰の密接な関係性をうかがわせると同時に地域ごとの多様性を示している。

また、各集落では講と呼ばれる団体が生まれ、信仰・経済・社会的な人々のつながりを通して地域社会における相互扶助の役割を担った。町内の各所には様々な講中碑が確認されており、その活動が広く多岐にわたったことを示している。講の活動は全体として数を大きく減らしたが、時代に応じた運営方法へと形を変えながら現在まで継続してきた地域もあり、本町における地域社会の維持に対して一役を担ってきた。

なお、かつては各家・各集落で行われた風俗慣習・年中行事なども数多く存在したが、現代に至るまで失われているものも多くある。

これら地域社会における信仰及び相互扶助の力は、本町における人々の営みの歴史そのものであり、今後、本町の歴史的風致を維持するにあたって欠かせない要素の一つである。



写真 4-4 国見石の採石跡



写真 4-5 鹿島神社例大祭（神事の様子）